

『源氏物語』『光源氏誕生』

◎授業ができないので、このようなプリントを作成してみました。本文と照らし合わせながら、必ず確認をするようにしましょう。

【第四段落】

◎「誰」が主語か？
 「上宮仕へ」という単語から、帝にお仕えする人で、打消
 の助動詞から「お仕えする身分では無い」ことがわかる。
 ↓以上から、桐壺更衣である。

初めよりおしなべての上宮仕へし給ふべき際はあらざりき。おほえいとやむい

語1

語2

尊敬ハ四・補助動詞・終止
 (作者↓桐壺更衣)

当然「へし」連体(終止接)

打消「ず」連用(未接)

過去「き」終止(連用接)

◎「誰」が主語か？
 「」に確定条件があります。「」までの主語は桐壺更衣。ではこれ以降は、
 「」に最高敬語が使われていますので、帝となります。

◎「誰」が主語か？
 「」に確定条件があります。「」までの主語は桐壺更衣。ではこれ以降は、
 「」に最高敬語が使われていますので、帝となります。

となく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊び

語3

語4

語5

語6

語7

◎なぜ「帝」への敬意となるか？
 この場面では、「誰」が参上するのかわるえればOK。
 ①「桐壺更衣」が「帝」の所へ「参上する」
 ②「参上する」は謙讓語。↓動作が及ぶ「帝」への敬意

謙讓ハ四
 「参上する」・未然
 (作者↓帝)

使役「ず」連用(未接)

尊敬ハ四・補助動詞・終止
 (作者↓帝)

の折々、何事にもゆるあることの節々には、まじり参上らせ給ふ。あるときには、

語8

語9

◎なぜ尊敬ではななくて使役なのか？
 この場面では、上に上つてくる動詞「参上する」候ひは両方ともに桐壺更衣の行動で謙讓語。
 ①その行為は桐壺更衣が「自発的」にしているのではなく、帝がさせている「行為である」。
 ②文章上に書かれてはいなくても、この文の中には「帝」や「桐壺更衣」がいることを認識。
 ↓「す」「せ」「む」が尊敬語で終んだ。「せ給ひ」「せ給ひ」「せ給ひ」の時に要注意。
 必ず尊敬の意になるわけではありませぬ。使役の対象(「」)は桐壺更衣がいるかいないかを必ず確認しましょう。

打消「ず」連用(未接)

大殿籠もり過ぐして、やがて候はせ給ひなど、あながちに御前去らず

語10

語11

語12

語13

尊敬ハ四・「大殿籠る」・連用
 (作者↓帝・桐壺更衣)

謙讓ハ四
 「候ひ」・未然
 (作者↓帝)

尊敬ハ四・補助動詞・連用
 (作者↓帝)

使役「ず」連用(未接)

打消「ず」連用(未接)

尊敬「す」
連用(未接)
(作者↓帝)

最高敬語

尊敬ハ四・補助動詞・連用
(作者↓帝)

過去「き」連体
(連用接)

過去「き」連体
(連用接)

もてなさせ給ひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、

語14

語15

◎「誰」が「誰」に「軽き方(軽い家柄の方)」に見えたのか？
①この場面は桐壺更衣が帝に、常にそばに扱われた場面。
②それを周囲の更衣・女御が見ていた。
③本来帝の側仕えは低い家柄の人物がやっていた。 ↓以上でわかりますね？

尊敬ハ四・補助動詞・連用
(作者↓男皇子)

尊敬タ下「二」思ほしおきつ「・連用(作者↓帝)

完了「たり」已然(連用接)

この皇子生まれ給ひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、

語16

語17

語18

◎接続助詞を「文節」が「文」を「文」が「文」を「文」という接続助詞は逆接・順接両方の確定条件「が」には順接はないの意味もあることを忘れず。
ここでは逆接確定条件(〜が)
※ここまででは周囲の女御・更衣が主語。この後、主語はかわります。

◎「この皇子」の主語は、「見えしを」の所で主語は「周囲の女御・更衣」からかわったと考えられます。では誰か？
↓「この敬語が使われているところを考えると「帝」と見ゆのが正解です。

打消「す」連用(未接)

当然「し」連体(終止接)

断定「なり」連体(連体・体言接)

ようせは、この皇子の給ふまじきなめりと「の皇子の女御は思し疑へり。

語19

接音便

推定「めり」終止(終止接)

存続「り」終止(サ未四已接)

◎「この皇子」って誰のことか？
「この皇子」が生まれて、帝は「心」と思ほしおいて、それを見た「一の皇子の母が疑うわけですから「一の皇子」ではあり得ません。この「この皇子」は「男皇子」となります。

◎なぜこの敬意は「一の皇子の女御」からなっているのか？
他の敬語は地の文(通常の文)で使われているため、「作者」から。この部分は「一の皇子の女御」が思っている部分なので会話文に準じることにする。その場合は、「その会話をした人」「その内容を考えた人」からの敬意に注意する。

人より先に参り給ひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなども

語20

語21

二方面の敬語

謙讓ラ四・「参る」連用
(作者↓帝)

尊敬ハ四・補助動詞・連用
(作者↓一の皇子の女御)

尊敬ハ四・補助動詞・終止
「一の皇子の女御」
↓男皇子

◎「誰」がどの「人」より先に「参り給」っているのか？
この部分の話題の中心は「一の皇子の女御」です。彼女が「参る」のは帝に対してです。また、帝には他に多数の女御・更衣が「参」っている訳ですから、「一の皇子の女御」が「他の女御・更衣」よりも先に「帝」に「参り給」っていたと考えられます。

◎「誰」の「誰」に対しての「やむごとなき御思ひ(大切に思ってお気持ち)」なのか？
上の「人より先に参り給ひて」の記述は、「一の皇子の女御」が他の女御・更衣と比較して特別な存在であることを示している。
その記述から判別すると、「一の皇子の女御」を「やむごとなき御思ひ」していると考えられるので、「帝」「一の皇子の女御」に対しての「御思ひ」であろうと考えられます。

尊敬サ四・「おはします」・
已然（作者↓皇女）

おはしますば、この御方の御いさめをのみぞなほ煩はしう、心苦しう思ひ聞こえ

語 22

語 23

◎「この御方」とは誰か？
この文の最後は帝への最高敬語で終わっている。
↓この文の主語は「帝」「帝」「いさめ」(意見)を申し上げられるのは、この文の中では「この皇子の女御」だけである。

◎なぜ「この」聞こゆ「は」「の皇子の女御」への敬意となるのか？
謙譲語は「動作が及び人への敬意」となります。「聞こゆ」の上の「思ひ」行為をしているのは帝。その思いが及んでいるのが「の皇子の女御」と考えられれば敬意の方向がわかると思います。

尊敬「さす」
連用（未接）
（作者↓帝）

尊敬ハ四・補助動詞・連用
（作者↓帝）

謙譲ヤ下二・補助動詞・連用
（作者↓帝）

謙譲ヤ下二・補助動詞・連用
（作者↓の皇子の女御）

尊敬ハ四・
補助動詞・連体
（作者↓人）

させ給ひける。かしこき御かげをば頼み聞こえながら、おとしめ疵を求め給ふ人

語 24

語 25

語 26

最高敬語
過去「けり」
連体（連用接）

◎接続助詞「ながら」(文P92)
①二つの動作の並行(〜ながら〜ママテ) ↓現代語と同じ意味。この意味の場合は問題にならない。
②逆接の確定条件(〜方〜モノ) ↓この意味が大事。きちんと覚えよう。
「」は②の意味になる。
※1 状態を表して「〜ママノ状態」を訳すとい場合もある。
①のバリエーション)
※2 名詞・副詞「〜」の「〜」の「〜」の「〜」の「〜」の意味になる。

◎誰を「おとしめ」誰の「疵を求め」するのか？
「この」人は、周囲の女御・更衣。それらが誰のことをさげすんで、誰の欠点を探したがるかは、ここまで読めばわかると思います。
ちなみに、「人」に敬語が使われている点から、さげすまれて欠点を探される相手は、「人」よりも身分が低いとわかります。

は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひを

語 27

語 28

語 29

断定「なり」・連用
連体形・体言接

係助詞（強意） 結び：連体

ぞし給ふ。御局は桐壺なり。

尊敬ハ四・補助動詞・連体
（作者↓桐壺更衣）

断定「なり」・終止
連体形・体言接

◎「なかなかなるもの思ひ」とは？
「なかなかなる」には「かえって〜しない(さわらない)方がまだ」という意味があります。なせばむなしい方がいらぬのでしゅうか？それをさわると「おとしめ疵を求め」らむ。「わが身」は「か弱くものはかなきありさま」であると思ひ知らさるるか？
↓「わが身」とは桐壺更衣であり、桐壺更衣が受けることで蔑まれ欠点を探される理由となることは何か。それは「帝の寵愛」ということになります。

【語句の意味】

1. おしなべて (副) ①すべて。②(下に助詞「の」を伴って)ふつう。ありきたり。
2. 上宮仕へ (名) 常に天皇のそば近くにいて、その用事をつとめること。
3. 上衆めかす (形シク) 貴人らしい様子である。貴人らしくふるまっている。
4. わりなし (形ク) ①道理に合わない。無理だ。②並々ではない。はなはだしい。
③耐えがたい。つらい。④仕方がない。やむをえない。 ↓ P219 No. 233
5. まっはす「纏はす」 (サ四) 〈自くまといつく。つきまとう。〉他くまといつかせる。絶えずそばに付き添わせる。
(連語) ①(そうするのが)適当な。ふさわしい。②そうなるはずの。そうなる運命の。
③立派な。それ相應の。 ↓ P150 No. 149
7. 遊び (名) 管弦の遊び。 ↓ P74 No. 54 欄外
8. ゆゑ「故」 (名) ①理由。わけ。②品格。由緒。③風情。趣。 ↓ P269 No. 300
9. 参上る (ラ四) 「上る」の謙譲語(高貴な場所に参る。参上する)。
10. 大殿籠もる (ラ四) 「寝」「寝ぬ」の尊敬語(おやすみになる)。 ↓ P173 No. 176
11. やがて (副) ①そのまま②すぐに ↓ P62 No. 45
12. 候ふ (ハ四) ①「あり」「をり」の謙譲語(高貴な方のおそばに)お仕える。伺候する。
②「あり」「をり」の丁寧語(あります。おります。ございます)。
③(丁寧語の補助動詞)く(ござい)ます。 ↓ P166 No. 166
13. あながちなり (形動ナリ) ①無理やりだ。強引だ。②むやみだ。はなはだしい。 ↓ P224 No. 241
14. もてなす (サ四) ①振舞う②取り扱う。取り計らう。③もてはやす。大切に扱う。 ↓ P188 No. 192
15. おのづから (副) ①自然に。ひとりで。②偶然に。たまたま。
③(仮定・推量の表現を伴って)万一。ひょっとすると。 ↓ P134 No. 126
16. 心ことなり (形動ナリ) (心構えや気配り、内容や趣などが)他と比べて際立っている様。格別であるさま。
17. 思ほしおきつ (タ下二) 「思ひ掟つ」の尊敬語(お思いになって取り計らう。思い定めなさる)。
18. 坊 (名) 皇太子の御所。転じて皇太子のこと。
19. 思し疑う (ハ四) 「思ひ疑ふ」の尊敬語(疑念をお抱きになる。気がかりにお思いになる)。
20. なべてならず (連語) 並々ではない。格別だ。 ↓ P136 No. 130 欄外
21. 皇女 (名) 「皇子」と同じ。帝の娘。
22. いさめ (名) ①〈禁め〉禁制。戒め。②〈諫め〉意見。忠告。諫言。
23. 心苦し (形シク) ①つらい。心配だ。②気の毒だ。見ていてつらい。 ↓ P208 No. 221
24. かしこし (形ク) ①おそれ多い。もつたいない。②すばらしい。立派だ。好都合だ。
③(連用形「かしこく」の形)非常に ↓ P93 No. 78
25. かげ (名) 〈影〉①光。②姿。形。〈陰〉おかげ。庇護。 ↓ P53 No. 33
26. 疵 (名) ①物のこわれ損じたところ。皮膚の破れ損じたところ。きず。
②不完全なところ。欠点。あら。③恥。不名誉。
27. はかなし (形ク) ①頼りない。あつけない。むなし。②ちょっとした。とるに足りない。
↓ P94 No. 80
28. なかなかなり (形動ナリ) ①中途半端だ。②かえってくしない方がました。 ↓ P144 No. 140 欄外
29. もの思ひ (名) 思い悩むこと。心配。